

ケンピスのために冤を訴える

『創造週報』二十九号に張非怯君が「新鮮な叫び」という文を書いて、『小説月報』の高滋君の「イエイツのタゴール観」の訳文について糾正を加えている。これは翻訳界の前途に有益な事である。この文章から見ると、高君は確かに誤りが少なくないが、張君自身も決して全部が正しいわけではない。中でわたしが見当がつかず、半日潰したのはその第九条の批評である。原文の英語は、

It is our own mood, when it is furthest from A Kempis or John the cross, that cries, "And because I love life, I know I shall love death as well." (註一)

高君の訳文は云う。これはすなわち我々自身の情調で、最古のケンピスあるいはジョン以来、「我々はこの生命を愛するから、わたしはわたしも死を愛するものであることを知っている。」

張君は八行の説明を加えて、彼の考えによって、これは我々の情調である、「我々はこの生命を愛するからわたしはわたしも死を愛することを知っている」と言うケンピスあるいはジョンとは相去ることまさに遠いと訳すべきだとしているようである。

しかしわたしが不思議に思うのは、なぜケンピスがこんな霊肉一致の話をしたのかで、まずそこから調査考証を始めよう。ケンピスの著作は、残念ながらわたしは一つ *Imitation of Christ* しか持たない。だがふつう徴引するのは大抵がこの一冊である。わたしは先ず *Everyman's Library* の中の十六世紀の旧訳本を調べたが、果たしてなかった。また一八八九年の *Liddon* 編の行分けの本も調べたが、結局ついになかった。——しかしながらそのためにわたしはそれだけで二時間の時間を潰した。ほんとうに不思議に思って、これはひょっとして……と思ったので、そこで *Tauchnitz edition* の『ギータンジャーリ』を取り出してよくよく調べた、(実を言うと、わたしはあまりタゴールが好きではない、彼の紙表紙の詩文を何冊か買ったことは買ったが、ほとんど読んだことがないのである、だからとても不案内で、よくよく読まなければならなかったのだ。) 第九十五首まで捲ったところで、*Eureka!* 第4節の下半分がまさしく次の二句であった。

And because I love life, I know I shall love death as well.

わたしは嬉しくて跳び上がった、ちょうど西澄先生があゝの瘦せっぽちのアダム・スミスの写真を見つけた時と同じように。

気の毒なトマ師よ、君の深い冤罪はなんとか晴らされた。もしそうでなければ、人々はほんとうに君がこんな異端の話をしたと信じ、君をセント・アグネス山から追っ払ったに違いない!

わたしはその時ふとイギリスの「市本」(*Chapbooks*)のなかの「ゴータムの賢人」(*Wise men of Gotham*)の故事を連想した。その中の一つに、ゴータムの十人が川に水浴びにゆき、浴後人数を数えてみると九人しかいない。十人が順番に数えても皆同じである。みんなは焦って大泣きし、一人仲間が溺れ死んだと信じた。あとで別の村の人が通りかかって、ようやくその欠けた人——その時数を数えてた人を探し出してやった。天下にはまことにこんな奇妙なことがある

もので、「いかにももってもらしく」そこで口角泡を飛ばしてケンピス、タンピスと争っていても、その言葉がまさにタゴールご老体自身の言葉で、しかもまたそれがこの本の中にあることをご存知ないのは、まことに面白い。

張君の文で第10節「聖バーナードに従って目を閉じた」かどうかの問題は、張君の解説は正しくないように思うが、幸いこれはただ文法と意味の上から読み取ることができるので、今は余計なことを言うにはおよばない。わたしの目的はケンピスが『ギータンジャリ』の言葉を言ったことがないということの説明すればそれでよいのだから。

最後に一言無駄話をしよう。張君の文中で末節の六行は、言い方があまりに感情的に過ぎる。わたしは決して一字か二字を改ざんして中国の批評家にお返しをしようというのではない。だがわたしは張君自身が二度の「手の責め」*を甘受することを承認するよう希望する。「大丈夫の一言は出ずれば司馬も追い難し」だからである。

三つの十二の日〔民国十二年十二月十二日〕、北京にて。

(註一) 大意は、「わたしは生を愛するから、死を愛することもできるだろうと思う、」これは我々自身の情調であり、まさにア・ケンピスあるいは十字架のヨハネと相去ること極めて遠い、ということである。

※初出：1923年12月16日『晨报副刊』

*二度の「手の責め」 張非怯は「〔この誤訳の指摘が〕もしもわざと嫌がらせをしたとか、故意に毛を吹いて疵を求めたとか言われるならば、私は喜んで十度の“手の責め”を受けたい。なぜならこうした事〔一篇の短文中にいくつも誤訳がある事〕は、なんとも悲しいくだらないことであるからだ」と書いている。「手の責め」とは子どもが教室で先生から罰として掌を戒尺で打たれる事。